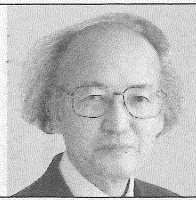


北見工業大学（北海道北見市）は今春、1学部6学科1講座の学科組織を1学部2学科8コースへ改組し、地域の課題に取り組める体制に改めた。高橋信夫学長に狙いを寄稿してもらった。

## 北見工大、学科を再編



北見工業大学学長

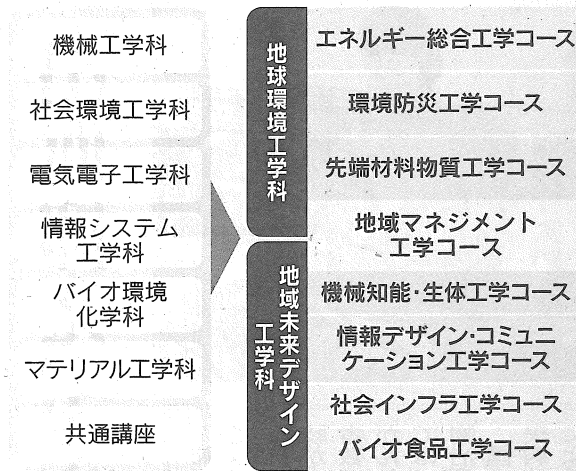
高橋 信夫

で、農業生産額が道内2位、林業と水産業が共に道内1位と盛んだが、急速に進む人口減少と高齢化で人材不足が深刻だ。日本には全都道府県に86の国立大学が整備されており、それぞれが地域の「知の拠点」として重要な役割を担っている。厳寒の地、オホーツクに立地する唯一の工科系国立大学として、北見工大はどのようなミッションを掲げ、地域に貢献していくべきなのか。我々の結論は、寒冷地におけるエネルギー・環境分野への取り組みと、1次産業関連分野とのより一層の連携強化であり、工学的イノベーションを通じて魅力あるオホーツク地域を創生することだ。

北見工業大学は北海道・オホーツク総合振興局管内にある日本最北の国立大学である。オホーツク総合振興局は面積が岐阜県にほぼ等しく、約30万人が分散して生活している。世界自然遺産の知床をはじめ阿寒、大雪山と3つの国立公園があり、自然の魅力にあふれ最大規模の学科組織改組を行った。機械、電気な

# 分野の枠を超え広く学ぶ

### 北見工大の組織改組



ど工学部特有の強固な学問分野間の縦割り組織を見直し、「地球環境工学科」と「地域未来デザイン工学科」の2学科8コース構成に組み替えた。

再編の狙いである。寒冷な気候で広大な地域に中小都市が分散するオホーツクでは、それぞれの区域で安価に使用できるエネルギーの確保が地域創生に極めて重要となる。地域創生には新規産業の創出が必要で、それには安価なエネルギーが不可欠だし、安心・柔軟に対応できる能力が必須な生活環境の構築・維持になる。日本の産業を担う人材の育成が今回の学科改組の目的である。供給基地から遠く決して支えるスペシャリストでなく、幅広い知識のもと技術の変化に対応できる柔軟な能力が求められる。そのような人材の育成が今回の学科改組の目的である。供給基地から遠く決して支えるスペシャリストでなく、幅広い知識のもと技術の変化に対応できる柔軟な能力が求められる。そのような人材の育成が今回の学科改組の目的である。

## エネルギー・1次産業 重視 ■ 地域創生支える

安価とはいえない。それだけに、自前のエネルギーを最大限有効に活用することは、オホーツク地域に極めて重要な意味を持つ。地域には本学が強みとする太陽光エネルギーやバイオマスなどの再生可能エネルギーがある。オホーツク海岸海底のメタンハイドレートも将来のエネルギー資源としての魅力を秘めている。エネルギーの確保から効果的な利用方法まで、工学的知見を基盤とした総合的な設計は極めて重要である。

このような地域のエネルギーの有効活用には、分野の枠を超えて様々な形態のエネルギーについての総合的に学ぶことが欠かせないが、従前の縦割り学科構成ではそのような学習ができる仕組みになっっていなかった。改革では地球環境問題というグローバルな課題を地域課題としても還元できることを意図して設置した「地球環境工学科」に、コースの一つとして「エネルギー総合工学科」を設けた。これにより学生は関連する工学

技術の習得も含めて、地味にふさわしいエネルギーシステムについて、従前に比べはるかに広い視野から考えを巡らすことができる。激変する今後の産業・社会に柔軟に対応できる工学技術者が育てられる。この一歩を踏み出した以上、あぐらをかいている暇はない。改革の狙い達成のためには、今までの汗をかく覚悟である。

日本全国に立地する国立大学のネットワークは国民の貴重な財産であり、日本の産業構造の糧基地としての基盤を工学的に支え、オホーツク地域を活力に満ちた地域へと創生することに、真摯に取り組まなければならない。これは、この地域に立地する国立大学の命題である。

そこで、1次産業を中心に据えて将来想定される課題の抽出を含め、工学的知見を総合的に活用し、

改革は最初の一步を踏み出した段階にすぎず、成果が出るのは数年先である。しかし、この一歩を踏み出した以上、あぐらをかいている暇はない。改革の狙い達成のためには、今までの汗をかく覚悟である。